

腎細胞癌甲状腺転移の1例

静岡市立静岡病院 病理検査室
望月裕一 落合真希 堂本浩二
江河勇樹 森木利昭

【はじめに】甲状腺に転移性腫瘍がみられることは少なく，甲状腺悪性腫瘍の1%程度とされている．今回，腎細胞癌術後に甲状腺転移をきたした症例を経験したので報告する．

【症例】70代女性．20XX年，左腎癌と肺転移（cT3aN0M1）の診断で左腎臓摘出術を受け，病理診断結果は腎細胞癌（淡明細胞癌）であった．以降，転移性腎細胞癌に対して分子標的治療を行っていたが，3年後，甲状腺右葉に38×36×25mm大の内部不均質な腫瘍結節を認め，穿刺吸引細胞診が行われた．

【細胞所見】背景は血性で，重積性の細胞集塊が多数出現し，集塊周囲からは細胞の解れ像が見られた．細胞質は豊富で泡沫状または顆粒状，好酸性やライトグリーン好染を示した．核は類円形～長円形で腫大，核形不整や皺状あるいは核溝様の不整も見られた．クロマチンは顆粒状で増量し，目立つ核小体が認められた．一部では核内細胞質封入体様の構造も見られたが，すりガラス状のクロマチンや乳頭状集塊，コロイドは明らかではなかった．濾胞性腫瘍の可能性は否定出来ないが典型像ではなく，臨床情報に記載された既往歴である腎細胞癌の甲状腺転移を疑った．残検体からセルブロックを作成し，免疫組織化学染色を施行した．腫瘍細胞はCD10，RCCに陽性を示し，Thyroglobulin，TTF-1，Calcitoninに陰性であり，この結果から腎細胞癌甲状腺転移と診断した．

【まとめ】甲状腺穿刺吸引細胞診で，日常遭遇しないような細胞像を認めた場合には，転移性腫瘍の可能性も考慮した対応を勧める．細胞診断に際しては，癌の既往歴に関する臨床情報の提供が重要であり，濾胞性腫瘍との鑑別には免疫組織化学染色が有用と考える．